



武術愛好家の楽しみと夢



広島文教女子大学人間科学部心理学科 教授
深田博己 (ふかだ ひろみ)

1976年、広島大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。島根大学を経て、広島大学定年退職、広島大学名誉教授。2012年より現職、学長補佐兼任。専門は社会心理学。著書は『説得と態度変容』（北大路書房）など。

趣味として楽しむ武術

私は、自分を「武術愛好家」だと思っています。武術愛好家ですから、武術は大好きですが、特定の武術に秀でた武術家でもありませんし、高邁な精神性を標榜する武道家でもありません。好きな武術を趣味として稽古し、それ以上に鑑賞して楽しんでいます。10代から20代の頃は、相撲、少林寺拳法、気の空手、パワー空手に熱中しましたが、体力・運動能力の衰えた50代以降は、武術のDVD鑑賞と護身術としての八光流柔術の稽古が最大の娯楽です。古武術の達人の技や演武は、ため息が出るほど無駄のない美しい動きで、まさに優れた芸術作品です。DVD鑑賞に我を忘れるひと時です。

八光流柔術の魅力

八光流柔術は、基本的に師匠と弟子との一対一の稽古法を採り、短期間での上達を目指す護身武道です。脱力と笑いの武道であること、型稽古であること、技の数が少ないこと（少数の基本技が多様な変化技に発展することを後で知る）が魅力でした。最初に通った広島市内のT師範の道場は2年半ほどで閉鎖になりましたが、私と30代のK氏の二人しか弟子がいなかったため、付きっきりで指導を受けることができました。稽古相手のK氏は、プロレスの世界チャンピオンを兄弟にもつ異色の人物でした。一つ一つの技を一日でも早く覚えるために、克明なメモを取りました。このメモが、一人稽古やイメージ・トレーニング

の際に、非常に役に立ちました。

生涯の師との出会い

道場が閉鎖になった私にとって極めて幸運だったのは、T師範の師であった椋山光峰皆伝師範から指導を受ける機会に恵まれたことです。お会いした頃60代半ばであった椋山先生は、全国師範会の副会長も歴任された柔術の達人です。もう弟子は採らないという椋山先生のもとに数年通って入門を許された40代のM氏（当時は合気道の道場主）と私の二人しか実質の弟子はいませんでした。私も1年間通った後、正式に入門を許されました。瀬戸内海側の広島市から日本海側の山口県長門市への月に1回の道場通いが始まりしました。新幹線とM氏の車で約8時間かけて自宅と道場を往復し、4時間の稽古に汗を流しました。椋山先生のご指導は、先生が習得された技と知識を惜しみなく全て伝える形の濃密な内容でしたので、1ヵ月に1回の稽古でも自分の技が上達していくのが分かりました。しかし、当時の稽古時間の90パーセント以上はメモに基づくイメージ・トレーニングでした。稽古相手がいなくても、イメージ・トレーニングである程度はカバーできることを実感しました。

道場をもつ夢の実現

稽古相手が欲しいとの思いから、自分の道場をもつために、還暦の年にさいたま市の本部道場で宗家の直接指導を受け、師範免許を授かりました。広島大学内に道場を立ち上げてから、定年退職す

るまでの約4年間は、週1回の稽古を楽しめる、夢のような時間をもつことができました。同僚の教員や学生が予想以上に多く入門してくれました。定年退職の年に、宗家から、八光流柔術と表裏一体である皇法指圧の指導員免許、柔術の皆伝免許、三大基柱と呼ばれる最終奥義を授かりました。しかし、免許は形だけで、実力は全くといっていいほど伴わないのが実情です。これを上達の可能性と楽観的に解釈すれば夢が膨らみます。

中断すれども続く夢

3年ほど前から老親の介護問題が切実化し、残念ながら柔術修業を中断せざるを得なくなりました。それでも、まだあきらめたわけではなく、60代後半の今も、まだ上達できると信じて、再開に備えています。簡単に習得できて、護身に役立つ空手術のほか、短棒術や短刀術などの武器術を統合した「素人の護身術」を構想するという夢も捨ててはいません。70歳を過ぎてても身体は動くでしょうか。それが一番の課題です。



師範技、皆伝技、三大基柱の巻物